仮設住宅暮らしの被災者

今必要なのは「交流」

田澤さん（弘前）岩手に通いボランティア

弘前市の会社員田澤隆さん（53）は、昨年の東日本大震災の発生後すぐに被災地に入り、現在もほぼ毎週末、岩手県沿岸に通ってボランティア活動を続けている。1年以上被災地を見つめてきた田澤さんは「今必要なのは、仮設住宅で暮らす被災者をできるだけ家の外に連れ出し、交流を生むための支援。幅広い分野の人にボランティアに来てほしい」と呼び掛けている。（大友麻紗子）

田澤さんが最初に被災地に入ったのは震災から2日後の昨年3月13日。これまでも新潟県中越沖地震や岩手・宮城内陸地震の際にボランティアの経験があり、すぐに被災地に向かうことを決めた。1人で車を運転し、まずは被災状況を確かめようと岩手県久慈市、宮古市、釜石市を回った。

翌週から約1カ月間の有給休暇を取得。宮古市田老地区を拠点に、車で寝泊まりしながら支援物資の仕分けを中心に活動した。その後も休日の度に田老地区に通い、さまざまなボランティアを続けてきた。

岩手県沿岸の被災地でボランティア活動を続けている田澤さん㊧

住民離ればなれ

田老地区では、昨年7月上旬に避難所を閉鎖し、被災者は仮設住宅に移った。基本的な衣食住の確保はできたが、田澤さんは「避難所にいた時より人々の交流が減ってしまった」と話す。足腰が弱いからと引きこもるお年寄りや、ボランティアが声を掛けても心を閉ざし、居留守をつかう人も出てきた。

抽選で決まった仮設住宅では、震災前に近所に住んでいた人とも離ればなれ。孤独死の危険性が指摘される中、仮設住宅の団地にコミュニティーをつくることが必要だった。

田澤さんは、ボランティアセンター「かわいキャンプ」の協力を得て、団地内にできた仮設集会所でのミニコンサートを企画。市民合唱団でステージマネジャーを務めた経験を生かし、月1回ほど学生やピアノの先生、琴の演奏家らのコンサートを開くと、集会所に少しずつ人が集まるようになった。

「音楽に集中することで、その時だけは嫌なことも忘れられるのでは。コンサートなんて絶対行かないと言っていたおじいさんが、玄関先まで出てきて歌を口ずさんでいるのを見た時はうれしかった」と田澤さん。仮設団地に住む人と、震災前から近くの地域で暮らす人がコンサートで出会い、初めて話すきっかけにもなった。

5月には大槌町でも初めてコンサートを企画。東北出身で東京在住の音大生らのグループが合唱を披露し、涙を流して聞き入る被災者もいたという。

1年たち人手減る

田澤さんは今後、音楽に限らず、被災者たちの趣味の世界を広げる手伝いをし、地域づくりに役立てたいという。「将棋や手芸、料理など何でもいい。やってみたいと思えるものが一つでもあれば、前向きな心を持てる。集会所にサークルができれば、人の輪が生まれる」と語る。特に手芸や工芸のスキルが身に付けば、いずれオリジナルの商品を販売し、生活に役立てることもできるのではないかと考えている。

一方で、震災から1年以上がたち、被災地にボランティアに来る人が減り続けているという。「被災者に知識や技術を教えられる人や、イベントなどの企画ができるボランティアがもっと増えれば。がれき撤去や側溝の泥上げなどの作業もいまだにある。1人でも多くの人に現場を見てほしい」と願っている。

演奏会や趣味の輪づくりに熱

交差点

5月に岩手県大槌町で行ったコンサート。仮設住宅に住む被災者が集まり、合唱団の歌声に聞き入った